



曳々応行事

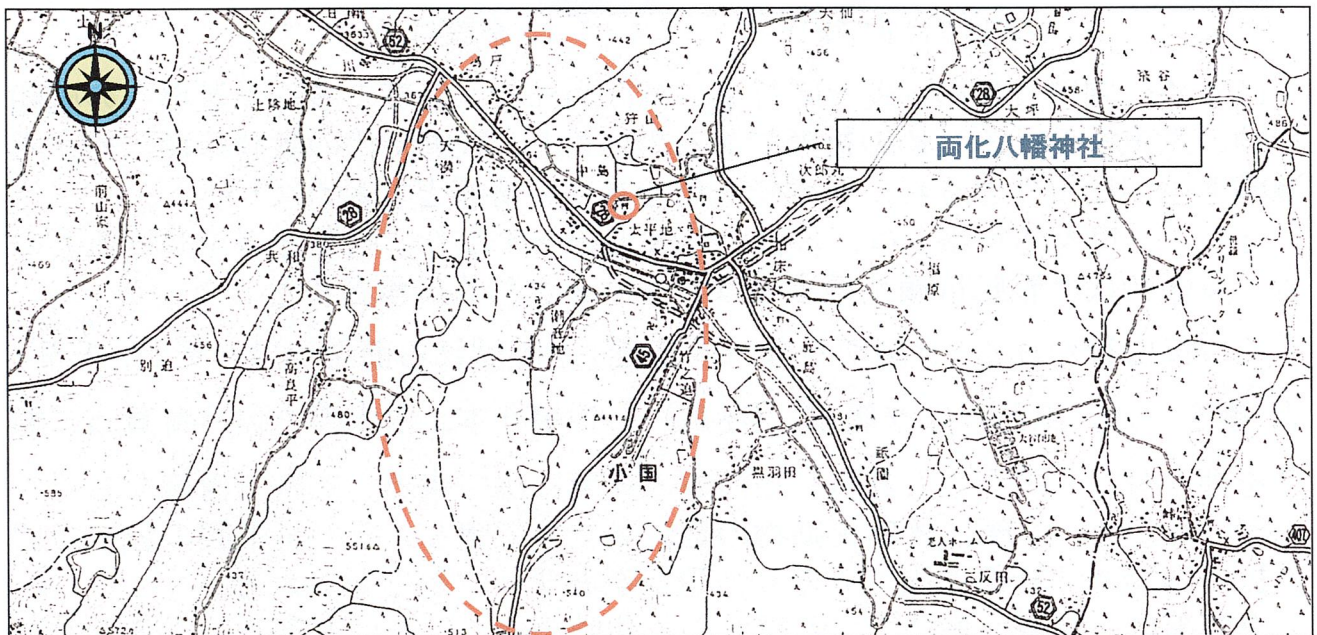
曳々応行事は、太刀役の男2人が出て、いろいろのしぐさをし、「もう一つ声をかり申そう」と言うと、武役の2人が「えいえいおう」と言う。三步進み三步退くなど3回くりかえす。

その後、中世の営農単位「名」^{みょう}に由来すると考えられる、と「花角力行事」^{はなずもう}が行われる。4組の相撲がとり行われ、伝統行事の終了となる。花角力行事は、現在小学生に

より取り組みがなされる。

両化八幡神社の名称は、もと「領家八幡神社」であったと推測され、中世、領家方の神社として創建されたものに由来するものと考えられる。

なお同社には、赤川氏が社殿を造営したことを記した永正14年（1517）の上棟棟札及び天正19年（1591）再興棟札が残っている。



【アクセス】

JR芸備線甲立駅から車で東へ約30分。世羅町立せらにし小学校の北側約200m上。同小学校から徒歩5分。

最寄りの駐車場：周辺の駐車場（祭礼時は神社の駐車場は使用不可）。

【見学・拝観の有無】

祭礼の日に限られる。

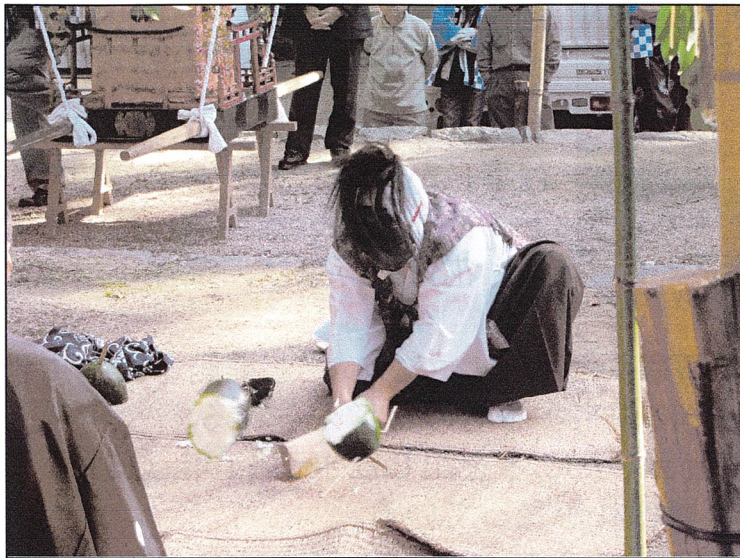
問い合わせ先 世羅町教育委員会社会教育課 0847-22-4411

【指定区分】世羅町指定無形民俗文化財 【種別】無形民俗文化財（祭礼）

【指定・登録名称】^{りょうけじんじゃ ゆうごうぎ} 両化神社の夕顔切り

【指定年月日】昭和46年（1971）2月16日 【員数】1件

【所在地】世羅町大字小国（両化八幡神社）



夕顔切り行事の様子

両化八幡神社に伝わる「夕顔切り」とよぶ神事は、昔、小国^{いのうえさんじょう}村井上山城（土居城）の城主、赤川筑前守元房が戦勝を祈願して大勝したので、この特殊行事を奉納したと伝えられている。

神殿東側の庭に、四方に青竹を立て、^{しめ}注連を張りめぐらし、ムシロ・ゴザ各2枚を敷き、一段上に同じく1枚を敷き式席を設ける。

はじめに関連行事の「^{えいえいおう}曳々応行事」が行われる。祭事の多くが豊穰への感謝や神の恩恵を受けるための祈願であるのに対し、戦国時代の戦勝祈願に対する満願奉納が始まりとされ、県内でも例を見ない奇祭といわれている。

そして「曳々応行事」は、式役から太刀をあずかり、勝ちどきを挙げるもので、戦国時代の戦勝祈願が祭事のはじまりとされる伝承と符号している。

その後に行われる、夕顔切りは、「夕顔面」と呼ばれる面をつけた男が、^{ちはや}千早・^{いりばかま}入袴をつけ、風呂敷に夕顔瓢^{ゆうごうびょう}（冬瓜^{とうがん}）と竹串4本、木太刀を包み背負って群衆を押し分け、式役2人着座した前述の式席^{こっけい}に出て来る。式席で滑稽なしぐさを行いながら、夕顔に竹串を動物の足に見立てて差し、その後木製の包丁で切り放つ内容で、社伝に出てくるヒヒ退治がモチーフかと思われる。

夕顔面は、怪奇な形相で、右眼大きく片眼小さく、鼻は右寄り、口角は右にはね上がった、まことに形相^{ぎょうそう}恐ろしいものである。応安元年（1368）の作と伝えられているが、作者は不詳である。